

## 言語地図の一解釈：「捨てる」の九州方言

木部, 暢子  
純真女子短期大学講師

<https://doi.org/10.15017/10519>

---

出版情報：文献探究. 8, pp.15-25, 1981-06-07. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：

# 言語地図の一解釈

「捨てる」の九州方言

木部 暢子

国立国語研究所発行の『日本言語地図』第二巻各図及び各図に、「捨てる」を表す方言についての報告がある。また、中央公論社から『日本の方言地図』（昭和四年）が出され、「捨てる」の方言はこの中でも一項目として取りあげられている。私は生粋の九州人で、そのせいかやはり九州方言形がいつも気にかかる。そこで「捨てる」についても、九州方言に注目して『日本言語地図』を調べてみると、北部九州ではウシツル・ウシツル・ウシツツ、中部九州ではウスツル、南部九州ではウツスル・ウツスツ・ウツスイといった語形が分布している。もとよりこれは大雑把なとらえ方であって、実際に『日本言語地図』を見ていただければわかるとおり、この他にいろいろの語形があることは、言うまでもない。

このように九州方言の語形について、『日本言語地図』の解説には、「九州のウシツル・ウツスルなどはウツナスル（二段活用）の訛形と考えられる」とあり、『日本の方言地図』にも同じく、「九州地方のウスツル・ウツスルなどは、ウツナスルからできたものであろう。強勢の接頭辞がついたという点では、中部のウツナヤルなどと同じではあるが、直接の関係があつたわけではなからう」とある。

私自身は北九州市小倉の出身なので、ウスツル・ウツスルなどを

使うことはないのだが、『日本言語地図』のこの説明や『日本の方言地図』の説明——さらに『日本国語大辞典』の「うちずてる」の項目に「なままり」としてウシツル・ウスツル・ウシテル・ウスツツ・ウツスルの語があげてあること——に、いささか疑問を持っている。九州方言のウシツル・ウスツル・ウツスルなどの語形は、ウチナスツ（ル）と考えるよりも、ウシナウとスツ（ル）の二つの語形の混淆によつてできたものではないか。そう考える方が、九州方言の諸語形——ウヒツル・フツスルなど——をも含めて、例外なく説明できるのではないかと思うのである。

以上がこの小稿の主旨であるが、次に諸々の観点から「捨てる」の九州方言形を見ていくことにしたい。

## 一 音韻変化、語形変化の面から

『日本言語地図』の解説や『日本の方言地図』には、「ウツナスル」からできたとあるが、接頭辞のついたものならば、当然ウチナスツルだらうから、ウチナスツルからウスツル・ウシツルなどの方言語形が、音韻的にみて発生可能な形かどうかを検討してみることにする。

その前に、語形を整理しなければならない。まあ大きく、(1)ウシツル(北部)、(2)ウスツル(中部)、(3)ウツスル(南部)の三つに分ける。そしてそれをこれに類するものとして、

(1)ウシツルに類するもの

ウシツツル語末が促音化した形

ウシツツル第三拍ツの直前に促音の挿入した形

ウヒツツル第二拍シがヒとなっている形

ウヒツツルウヒツツルの語末が促音化した形

(2)ウスツルに類するもの

ウスツイ語末がイ音便化した形

(3)ウツスルに類するもの

ウツスイ語末がイ音便化した形

ウツスツ語末が促音便化した形

フツスル語頭のウがフとなっている形

以上のような語形があげられる。語末イ列音ウ列音が促音化するのと、並びに・ルがイ音便化することは、九州方言の特徴であり、夕行音直前に促音が挿入することは、九州方言に限らず日本語に認められる特徴である。従ってこのようにまとめることは諦承いただけらう。

それでは果して、右の(1)～(3)の語形は、ウチナスツルから生まれたと考えられるだろうか。

(1)ウシツルの類について ウシツルがウチナスツルから生ずるためには、UCI+SUTURUの接合部分に、音韻の取り替えと脱落

が起ったと説明しなければならない。普通、接頭辞のウチは、語末母音ウのみが落ちた形UTで後部、ウツヤル、ウツタク、ウツタクのような語形を作るか、あるいは、ウチカケ、ウチヤケのように脱落のない形で結合するのであって、前記のような形態変化をすることは、他に例がない。

ウヒツツ(鹿見島)の形は、ウチナスツルからの直接の出現は不可能で、いったんウシツルを経て更にウヒツツができたと考えれば、第二拍のヒの音を説明することができない。しかしそうすると、ウシツルが九州北部と鹿見島との、分断されたニヶ所に存在することとなり、このことの説明のためには、九州全体にウシツルが分布していた時期を考えねばならなくなる。

ウシツルの類の諸語形も、ウシナウとスツルとの混着によってできた語形だと考えると、これらは解決がつく。ウヒツル・ウヒツツも、ウシナウのシがヒと交替したと考えれば、その出所が明かになるのではないか。ウシツツルという語形は、あるいはウシナウとスツルが混着してウシスツルという語形を作り、更にスが促音化してできた語形かもしれない。

(2)ウスツルの類について ウスツルがウチナスツルから生ずるためには、接頭辞ウチの語末音節の脱落した形UとSUTURUとが結合したものと考えねばならない。しかしUで述べたとおり、接頭辞ウチは、UTまたはUCの形で形態素となるのが普通であって、この形態素末音の閉鎖の要素は、強竟の接頭辞の要素としては不可欠のものと思われる。従って右の解釈は妥当性がうすい。

これ、ウシナウとスツルとの混淆によると考えれば、うまくいくのではないだろうか。そして、ウツスルができれば、容易にウツスツイはできる。

(3)、ウツスルの類について、ウツスルがウチナスツルから生ずるためには、接頭辞ウチの語末母音音素の落ちた形Uと、スツルの第一拍めがそっくり落ちた形UCが結合したものと考えなければならぬ。接合の際、語中の音素の落ちることはほとんどなく、スツルがスルになつてしまつては、意味に変化をきたしてしまつて、ウチナスツルからウツスルができたと考えられるには無理がある。ウツスツは、ウチナスツと考えることのできる唯一の語形である。南部九州では、イ列音ウ列音の促音化が起こりやすい。しかし、ウツスツイは説明不可能である。イ音便化するのには語末のリ・ルのみであるから、ウツスツイはウツスツからの変化ではなく、ウツスルからの変化だと考えねばならない。フツスルなどは、ウチナスツルでは全く説明不可能である。

この場合も、ウシナウとスツルとの混淆と解釈することによって解決がつくのではないか。これは、(1)・(2)のように簡単にはいかない。ウシナウとスツルとの混淆によつてウシナスツルという形をいつたんは作る。九州ではイ列音ウ列音の促音化が起こりやすいので、ウシナスツルの第二拍以下の全てが促音化する可能性がある。言い替へれば、きめめて不安定な語形だということだ。結局、二拍めと四拍めとが促音化してウツスツルとになり、更にウツスルの形ができたのではないだろうか。このあたり、もつとよい解釈もありそうである。ただ、

『日本語地図』によると、ウツスルの分布する大分県(大分)東には、イツスルという語形が見え、鹿児島(鹿児島)にも同語形が見えている。とすれば、ウシナウ、スツルの混淆に當つて、イツスルも一役買って、ウツスルが生じたと考えられることのできるのである。

フツスルは、先に述べたとおり、ウチナスツルからは決して現れない。ところが混淆説によれば説明がうまくつく。九州では、スツルもフツルとすることがあり、フツスルの語頭フはフツルのフから来ていると思われる。ウシナウとスツルとの混淆で、普通にはウツスルという語形を作るが、この地域ではスツルをフツルと言ひ、語頭フ音が印象的なためにフツスルという語形を作つたものと考えられる。

もう一つ注目すべき語形をあげよう。それは福岡県(福岡)あたりや一ヶ所ある、ホツツルという語形である。私の調査したところでは、筑後市八女の男性でホスツルという語形を使うことがあった。地図のホツツルは、ホスツルから変化したものと思われる。この地域は「捨てる」ことをホカスとも言つた地域であつて、ウシナウとスツルが混淆を起すかわりに、ホカスとスツルが混淆を起しているのである。

以上のように、音韻変化、語形変化の点では、九州の方言語形を説明するのに、ウチナスツル説よりもウシナウとスツルの混淆説の方がよいのではないかと思う。

二 ウシナウ、スツルの意味の面から

九州の方言語形、ウシツル、ウスツル、ウツスルなどが、ウシナウとスツルとの混淆によってできたとするならば、その意味をもう一度吟味してみなければならぬ。混淆を起すためには、意味の類似がなければならぬからである。さいわい、両語形は中史文献にしばしば現れている語形であるから、これを手がかりとして、ウシナウとスツルの使われ方に触れてみよう。

まず、スツルについて、この語は古代から意味にあまり変化のない語の一つで、『日本国語大辞典』(小学館)によれば、九項目の意味分類がなされている。しかし、これらはいずれも「積極的に自分から遠ざけること」を中核的意味として持っている、スツルの基本的意味はこのように考えてよいと思われる。早い例としては、

万葉 570 富人能家能子等能伎留身奈美又夕志須都良半純綿良

波母(山上憶良)

同 19 4211 玉刺壽毛須瓜三柑争下婦問為家留……

などがあげられようか。『源氏物語辞典』(北山給太氏著)に、「心をとめず、ひきつくりはず、無造作になす」という項目があつて、

若紫 よしある手のいとあてなるをうち捨て書い給へり

末摘花 白き紙に捨て書い給へるしもぞ、ゆくをかしげなるの例があつてある。これなどは「積極的に遠ざける」とは言いにくいかもしれないが、自然にそうなつたと言うよりは、個人の意志がそこに働いて、「気取らむせずにお書きになつた」「わぶと無造作に書き捨てたのがかえつて興がある」と解釈できるところだ

ろう。やはり作意的な無造作である点、積極性に通ずる所がある。以降の文献でも、スツルはだいたい「積極的に自分から遠ざける」の意味で使われている。

次にウシナウ。これには二通りあつて、①自分の意志でなく、持っていたものをなくす、②積極的になくするようになる「意である。①の意味では、

万葉 577

之呂多倍能安我之多其呂母早鬼奈波良也三礼和我せ

伊勢 9

政多太布麻位你 わかし、まどこ、友だちの人をうしなへるがもとにやりける。

平家 粟根斬 雑色、半飼色とうしなひ

同 法師問答 面目を失ふ

などの用例があり、物・人・情態などをなくすことである。②の意味では

源氏 鞠殿

年頃しづみつる罪つしぢふばかり、御行ひをとほおぼしたてど

同 御法

深き心もなき人さへ、罪をうしなひつべし。

枕 一三二

なにせむとすと言ふと文字を失ひて、ただ言はむする、里へ出でむするなど言へば

平家 尚標

ほしいまに玉法をうしなひ、仏法をほろぼさんとす

同 鶏

よしなき謀叛もおこいて、宮をもうしなひまいらせいやいや小督があらん限りは世中よかるまじ、めし

いだしてうしげはん

のようば用例がある。①罪を減する、②物などを積極的になくする、③殺す(へ人の命を積極的になくする)と三つにまとめられるだろう。  
『平家』では、ウシナウの半数以上が④の意味で用いられており、特徴的である。

ウシナウの①の意味の場合には、積極性の有無によってスツルとの区別がはっきりするが、②の意味ではスツルとの区別が明確でない。ウシナウの②の意味のうち、④と⑤は持足の用法であるからまだよいとして、③の場合は、スツルとほぼ同じ意味をあらわすことにする。そこで、④の用法をもう少し詳しく拾ってみることにしよう。

伊勢 五

もとの心うしなはまじまうをけるにぢん有ける。

源氏 橋姫

反古どもの、徴くさきと、袋に縫ひいれたる、取りりであつたてまうる。お前にてうしなはせ給へ。

同 窟木

寝殿を失ひて、ことぞまにも、造りかへんの心にて

今昔 六

鶴足ノ郡ノ女ノ身子焼失ヒツ

同 三三

築給ヘル池子失ヒタラムニ

同 二五

其家ノ近辺ハ千余家ヲ悉クセシ失ツ

『伊勢』『源氏橋姫』『今昔』などは、まさに「捨てる」の意味で使われている。『源氏窟木』『今昔』の三例は、「捨てる」より一層激しくなつて、「壊す」の意である。時代が下るとこのような用法はだんだん少なくなり、終には姿を消すようであるが、これら④の意味での文献例から、確かにウシナウとスツルと

がきわめて近い意味を持つていたことがわかるのである。

九州地方でウシナウとスツルが混淆を起した理由も、これではっきりした。すなわち、ウシナウとスツルは、その意味が似ていたために、混淆を起しうる状況にあったのだ。

それならばなぜ、混淆は中東で起こらず九州のみで起こったのか、それは、例えば都では規範意識が強くてこの種の変化を妨げたとか、九州地方では混淆によって新語形を作ることが多かつたとか、いろいろ事情が考えられるだろうけれど、両地方の意味体系のちがいを考えておかなければならない。都では、ウシナウとスツルは意味の似たことばであつたとしても、両者は別語として区別を有していた。ところが九州では、ウシナウとスツルは別語としての区別を失つて混淆語形を作る。これには、九州が「失う」と「捨てる」とを区別しない体系を持っていたという要素が関係しているのではないだろうか。これについては、次に述べてみたい。

### 三 意味体系の面から

『日本言語地図』63図は、「スツルを」紛失するのの意味で使うか」の地図に打っている。九州ではスツルという語形は実際には使わず、スツルとかスツツとか言うはからだから、63図は九州方言に当てはめた場合、「スツル、スツツなどの語形を」紛失するのの意味で使うか」という質問におき替えてよいものと考ええる。

63図によると、「使う」と答えた地域は、九州の中・南部と長崎

の島の地方で、これはウスツルの類、ウツスルの類を使う地域とは  
ば一致している。九州北部は「使わない」地域であるが、『日本言  
語地図』には「紛失する」の項目は取りあげられていないので、具  
体的にどのような語形を使うのかはわからない。

ところで、『日本語地図』の解説には、日本各地で「失う」と  
「捨てる」とを同一語形であらわすことを述べたあと、次のように  
言っている。

日本語は、「失う」と「捨てる」とを、語形によって本来区別し  
なかつたのではないかとさえ言え、言えそうである。西日本では確か  
に「失う」についてはウシナウと言ひ、「捨てる」を表わすウス  
ツルヤウシツルを使わないうのであるが、この方がむしろ、地方  
的な現象のように思われる。

九州地方は、果して『日本語地図』の言うように、「捨てる」と  
「失う」とを語形によって区別する特殊な地域なのだろうか。

九州地方で「紛失する」にどのような語形が使用されているかは、  
『日本語地図』ではわからない。そこで、九州大学国語国文研究  
室の大学院生、学部生を対象として行なった筆者の調査によつて、  
次に示すこととする。インフオーマントが少々若いという欠点はある  
かもしれないが、なるべく父親母親、お年寄りのことばを思い出  
してもらふことにした。おむねど郷里に電話でたずねてくれた学生  
もいて、大変ありがたかった。

福岡 行橋

ウシナウ

小倉

ナクス、ナクナス

博多 ナクス、ナクナス

直方 ナクナラカス

八女 ノーナカス、ノーナラカス、ウシナウ

朝倉 ノーナカス、ウシナウ

大牟田 ノーナカス、ウシナウ

佐賀 佐賀市 ウシナウ

長崎 長崎市 ナクナラス、ウシナウ

五島 壱岐 フツツ（「捨てる」と同形）

五島 上五島 ノーナラカス

大分 竹田 ノーナカス

熊本 球磨 ウシナウ（「捨てる」はウシツル）

宮崎 北諸県 ウツスイ（「捨てる」と同形）

鹿児島 枕崎 ウツスツ（「捨てる」と同形）

へ註ノーナカス、ウシナウカスなどの語形があらわれたのは、質問の  
しかたが、「定期券なども自分の責任で紛失することをも何とい  
ふか」というものであったためと思われる。質問のしかたをも  
う少し工夫すればよかつたかもしれない。なお、できるだけ  
多くの語形を採集することにしたので、二つ以上の語形を  
あげた所がかなりある。

北部九州の福岡県、佐賀県、長崎県でナクスやノーナカスなどと並  
んで、ウシナウが使われる。これは『日本語地図』の「ウシナウ  
と言う地域が、地点（近畿に4地点、他はすべて九州西部）現われ

る」という記述と通じる。ところが、九州中・南部の熊本県、宮崎県、鹿児島県では「捨てる」をあらわす語形と同一語形のウツスイ、ワツツなども用いており、「日本語地図」の図とは一致しない。<sup>(註9)</sup>これはなぜだろうか。思うに、「紛失する」と言っても「自分の不注意でなくした」とか「気づかないうちになくなっていた」とかいろいろな意味あいがあり、それに伴って語形にもいろんなものが網の目を作って存在しているのではないか。図では、語形をスツル(ハスツツ)の一つにしほって質問したために、たとえそれが「紛失する」ことをあらわす最も代表的な語形ではないとしても、使わないこともないという場合には「使う」という答えが得られるのではないか。だから図で「使う」となっている地域でも、逆に「紛失すること」と言いますか」と尋ねた場合には、必ずしもスツルやスツツが得られるとは限らないと思う。それはさきの私の調査でスツルやスツツという語形が得られないことでも明かだろう。図のような質問形式を用いている地図が、「日本語地図」にいくつがあるが、これは大変興味ある試みで、このような調査は貴重であろうが、読み方もよほど注意深くせねばならないと思う。

以上によって、九州地方の意味体系は、中・南部が「捨てる」と「紛失する」とを区別しない体系、北部が区別する体系ということがわかった。それでは、このような現在の体系は、どのようにしてできあがったのか。「日本語地図」の解説は「地方的な現象」と言っているのみで、詳しい説明をしていない。関東地方の説明に倣って、九州地方の歴史を推定してみよう。

その前に、沖縄に目を向けてみよう。沖縄の方言は私ほど手に負えるものではないが、図によると沖縄ほぼ全域にスツルの類の語形が分布している。図ではやはり全域的にスツル類の語を紛失する意味で「使う」とされている。図の扱いは、さきに述べたように注意を要するのだが、この場合、スツルという一つの語形によってあらわされる意味は「捨てる」と「紛失する」との両者なのだから、「捨てる」と「紛失する」とはほぼ同じものと言ってよいだろう。すなわち沖縄は両者を区別しない体系を持つている。

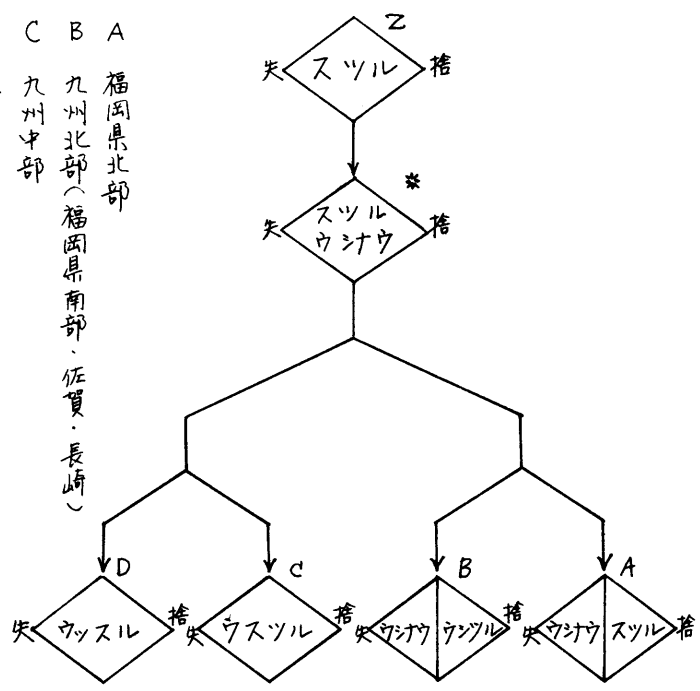
おそらくは、沖縄のような体系が九州方言の古い姿ではなかったか。そのへウシナウという語形が中史から入ってくる。ウシナウという語は、意味的に「スツル」ときわめて似かよった部分があり、九州自体も「捨てる」と「紛失する」とを区別しない体系だったのだ。ウシナウとスツルとは混清を起こして、九州各地でそれぞれにウシツルやウスツル、ウツスルなどの語形を作る。(ウシナウは沖縄まをば広まらなかったらしい) 混清語形がそれまでのスツルに取って替わったのが、九州中・南部である。一方、北部九州は、本州からの働きかけが頻繁にあるせいから、「紛失する」の意味では後に入ってきたウシナウが定着し、混清語形ウシツルは「捨てる」の意味を分担して持つこととなる。さらに本州に近い福岡県の北部では、混清語形を作らずに、スツルとウシナウとで「捨てる」、「紛失する」をあらわす体系を持つようになる。九州方言の諸体系は、このような推移を経てできあがったのではないか。これを次のように図式化してみた。



「捨てる」の九州方言形が、ウチナスツルでなしに、ウシナウとスツルとの混淆からできたことは、これを明かにしようとすが、

四 古方言書の方言語形の面から

- A 福岡県北部
- B 九州北部(福岡県南部、佐賀・長崎)
- C 九州中部
- D 九州南部
- Z 沖繩



最後に、ウチナスツル説のあらわれに背景として、古方言書の記述に触れておくことにしよう。

ウシツルやウスツルなどは、もちろん中央の文献にあらわれることはないのだが、江戸時代になると九州方言に注目した書物が書かれるようになり、この中にウシツルやウスツルなども見えてくる。

ウシツルは、『ほまおき』(福岡県久留米方言集、久留米藩儒者野崎教景編集、天保一〇(一八一九)年から嘉永五(一八三三)年の間成立)、『菊池俗言秀』(熊本県菊池方言集、菊池神社社司永田直行著、嘉永七(一八三六)年成立)、『町方盛衰記』(蒲原大蔵著、江戸末期成立)に見える、次のようにある。

ほまおき(黒岩翻刻本による)  
 うして、うちすて、打捨せ ウステ、とも云  
 うっちゃって 打遣せ

菊池俗言秀(『国語学大系』二十四による)  
 うしつる 藪ノ歌ナルヘシ(『国語学大系』二十四による)  
 町方盛衰記(『蒲原大蔵戯作集』一四による)  
 ヤ助 担ぢんさん方ハわき溜に錢と米もつしてばしござろか

『ほまおき』には、この他にホカス、ホカラカスも載っている。  
 ほりだす ほり出す ほかす ほからかす ほりりこむ 此類  
 多し、ほふらかす 何れも誤也 放下也

ウスツルは、『望春随筆』(福岡県秋月方言集、秋月黒田藩士平田望春撰著、天保五(一八三四年成立)に、

ウスツル 只捨るよりはウの字二字にて、勢のつく形有。

打捨の略成へし。

とある。また、さきの『ほまおき』の「うして」の項に、「ウスツル」とも云」とあって、ウスツルの例としてよいだろう。『望春随筆』には、ホカス、ホカスの語形も見られる。

ホカス 物をすつると俗にホカスと云。 おちくぼの物語に、  
ほかかし給ふとあり。

これらの古方言書から、近世後期には「捨てる」の意味で、ウシツルヤウスツルが用いられていたらしいことがわかるが、それと同時に、ホカス、ホカスといった語形も使用されていたようだ。このような近世後期の方言分布情況は、現在とほとんどちがぬ。『日本言語地図』と比較することで、そのことは確かめられる。

これらの古方言書は、語形と同時に意味、語源解釈らしきものにもまを言及している点で注目される。これによると、『ほまおき』と『望春随筆』とはウチナスツル説であり、『菊池俗言考』はウツルの訛説をとっている。ウシツルヤウスツルの語源をウチナスツルと解釈するのは、このへんが最初らしいが、この説を、文献資料であるという点だけで無批判に受け入れるのは誤っている。<sup>(注3)</sup> 江戸時代に貝原益軒、新井白石らによって無理な語源解釈が行われたことや、音義言靈派と呼ばれる人々のこじつけ的語源解釈などを思うべきである。方言書の解釈にしても事情は変わらぬ。文献の記述は、それはそれとして受け止め、近代的研究方法を駆使して新しい解釈を試みるのが、私どもの取るべき態度かと思う。明治以降に編纂され

た方言集にも、ウチナスツル説を取っているものが非常に多いのであるが、『日本言語地図』も含めてこれらの近代の編になるものだとすれば、その態度は反省されなければならない。また、江戸時代の文献の記述をそのまま受け入れたのではないとしても、ウチナスツル説をとることの根拠がはっきりしない限りは、江戸時代の方言書の態度と何ら変わりがないことになる。

ところで、『菊池俗言考』の「ウツル(棄)の訛」説について、ひと言ふれておこう。ウツル説によれば、菊池のウシツルは何とか説明できるとしても、九州方言の全体を説明できるわけではない。しかも文献によると、ウツルが単独で使用されることはなく、「曾<sup>そ</sup>道<sup>みち</sup>奴<sup>ぬ</sup>岐<sup>ぎ</sup>字<sup>じ</sup>豆<sup>まめ</sup>」(記神代)、「浮<sup>う</sup>積<sup>せき</sup>干<sup>かん</sup>都<sup>と</sup>磨<sup>ま</sup>」(神代紀上)、「追<sup>お</sup>ひう<sup>ひう</sup>つ」(伊勢四)などのように、複合動詞の後部成素となる。また使用頻度の低い点や『日本言語地図』にウツル(ウツル)の語形が見えないことから、ウツルは口頭語としては定着しなかった語形ではないかと思われる。そもそも、『菊池俗言考』は、里言を選び出すというよりは「むしろ雅言・古語に焦点をあわせ、その語源を明らかにしようとしたものである」という<sup>(注4)</sup>。従って『菊池俗言考』のウツル説も、誤った語源解釈だということになる。

このように、江戸時代古方言書にウチナスツル説があるからといって、ウシナウとスツルとの混淆説を否定する論拠とはならない。逆に、江戸時代後期には語源がもはやわからなくなっていたとすれば、混淆の起こった時期がかなり古く溯るといふ証拠になるのでは

ないだろうか。

小橋は、解釈を九州地方という一地域のみ限定したために、あるいは狭い考えにとらわれているかもしれない。ただし、全ての語形に無理のない解釈を施すことに注意はあったつもりである。どうかよろしく御教示賜りたい。

なお、小橋のための調査で、九州大学国語学国文学研究室のみがさんに、たいへんお世話になった。御礼申しあげる。

### 註

註1 意味をあらわす場合は漢字、ひらがなを用い「」に入れ、

語形をあらわす場合はカタカナを用いることにする。

註2 『九州方言の基礎的研究』(風間書院)266ページなど参照

註3 ローマ字表記は、『日本語地図』に倣った。

註4 語中音の脱落には

ヨメイリ(嫁入)→ヨメリ

アブラアゲ(油揚)→アブラゲ

コツジキ(乞食)→コジキ

フンデ(筆)→フデ

などがあるが、多くは接合部分の母音音素、子音音素の脱落である。

註5 『日本語地図』24図、『はまおき』(久留米方言集)な

どによる。本稿第四節参照。

註6 『平家物語』において「殺す」を意味するウシナウの例は、

御命うしなひ奉るまでは(腰越)

近江の国にてうしなひまいらせて候よし(六代)

あの成親うしなひれん事(小教訓)

などがあって、あるいは敬意の備わったことばなのかもしれないが、検討が必要であろう。

註7 混淆例と思われるものに、次のようなものがある。

ウツブセル(うつ伏せる)→ウツムクナフセル

ヨリコロブ(寝ころぶ)→ヨリカカルオネコロブ(?)

クロボエル(泣き叫ぶ)→クロナキオボエル

ヒツクリコケル(ころぶ)→ヒツクリカエルオケケル

註8 それとも『日本語地図』63図の中・南部九州の●の記号

は、スツル、スツツを使うという意味ではなしに、ウチナ

スツルから生じたと考えるところのスツル、ウツスツな

どを使うという意味なのだろうか。それならば私の調査と

一致する。しかし、ウツスル、ウツスツがたとえウチナス

ツルからできたのだとしても、スツルとウチナスツルとは語

形も意味も異なる別語と見なければならぬ。やはり地図

の●の記号は、九州においてもスツル、スツツを使うとい

うことをあらわすとして考えられない。

註9 第二節参照

註10 松田正義氏『古方言の追跡研究』(明治書院)による。

註11 『蒲原大蔵戯作集』一による。会話文に佐賀方言が使用してある。

註12 「古」とは『古事記』のことである。

註13 崎村弘文氏「近世末期方言資料としての『はまおぎ』——現代方言よりする文献批判——」(『語文研究』49号、昭和55年)に、「必ずしも十分な資料批判を経ぬまま、誤ったあたりで方言史研究に利用されているものがある」という記述がみえる。

### 補註

「捨てる」「紛失する」の歴史も考えるところならば、この他にウス(ウセル)、ウツ(ウツル)などの語形を考慮に入れねばならない。しかし、稿はそこまで手をひろげるものではない。あくまで『言語地図』の一解釈にとどまるものとする。

—— 純真女子短大講師 ——